# 国際社会学部―モンゴル(中央アジア地域)

# 多様なモンゴル人の世界

## モンゴルとモンゴル人

モンゴル人は、中央ユーラシア北部のステップ (草原) 地帯に展開 した遊牧民の末裔です。現在でも、遊牧文化に根差す社会を築き、遊 牧を行っている人もいます。

日本では、「モンゴル人」というと、モンゴル国の範囲に暮らすモンゴル人が想像されるのではないでしょうか。しかし、右の地図の通り、遊牧文化に根差した社会に暮らすモンゴル人は、モンゴル国以外にも、中国、ロシアを中心として中央ユーラシアの広い地域に暮らしています。モンゴル (人) を学ぶ、ということは、このような広大な中央ユーラシアの遊牧社会の現在を学ぶ、ということを意味しています。

本学では、この広い地域のモンゴル人に関する言語、文化、宗教、歴史、現代問題などを、中央ユーラシア、東北アジア、という広域的な視点から学ぶことができます。様々な文化が交錯する中央ユーラ

ロシア連邦 パイカル湖 アリヤート モンゴル国 北京 中華人民共和国 パキスタン

な税点から学ぶことができます。様々な文化が交錯する中央ユーラー・シアのモンゴル人の世界では、遊牧文化を主軸として他の文化と混交したハイブリッドな文化が多様に形成されました。民族問題、近代化、グローバル化、文化的共生といった現代世界を理解する上で重要な諸問題を、モンゴル人の世界から見出すことができま

1990年代のモンゴル国の地方

(成田龍一他著『アジア人物史 10 民族解放の夢』集英社、2023 p.471)

しています。

# モンゴル国一モンゴル人の独立国家

モンゴル国は、現在世界に存在する唯一のモンゴル人の独立国家です。現在の人口は約350万人です。首都オラーンバートルには150万人以上が暮らしており、人口の一極集中が進んでいます。かつてこの国は、ソ連との強い関係のもとで社会主義国家建設が目指すモンゴル人民共和国でした。1980年代後半のソ連圏社会主義諸国における民主化の波はモンゴル人民共和国にも及び、1989年に民主化運動が起こりました。その結果、1992年、社会主義を放棄したモンゴル国が成立し、資本主義化が始まりました。



近年のモンゴル国首都オラーンバートル

1990 年代には社会主義の行政システムの全面的廃止と急激な資本主義化により、物資の

す。モンゴルを学ぶことは、現在世界が抱える諸問題解決のために、他の地域の経験からは得られない知恵を獲得することを意味

欠乏、社会インフラの不安定化が発生し、社会が混乱しました。しかし、21 世 紀に入る頃から経済が回復方向に向かい、現在に至っています。

現在のモンゴル国は、遊牧文化を社会の根底に残しながらも、**天然資源開発**で国家の経済を運営しています。外交面では、ロシア、中国という2大国と隣接しながら、「第3の隣国」として日本、アメリカ、韓国などとの交流を重視する政策を取っています。

「モンゴル人の」独立国家、とはいっても、モンゴル国内には多様な人々が暮らしています。例えば、西部地域を中心として、カザフ人がモンゴル国内に暮らしています。カザフ人は、カザフ語を母語としながら、独自の文化を築いています。モンゴル国は、多様なエスニックグループを内包した国なのです。

#### 広い地域のモンゴル人

モンゴル人は、モンゴル国にだけ暮らしているわけでは決してありません。現在、 中国、ロシアを中心として、広い地域にモンゴル人が暮らしています。

中国では、主として東北部(満洲)、内モンゴル自治区、青海省、新疆ウイグル族自治区に、多様なモンゴル人諸集団が暮らしています。

一方、ロシア連邦では**カスピ海北西部(カルムィク)、バイカル湖周辺(ブリヤート)**にそれぞれモンゴル人集団が暮らしています。

これらの地域のモンゴル人は、20世紀の中国・ロシアの激動の歴史の中で、中国・ロシアの統治を受け入れつつも、そのもとでモンゴルの文化・習慣の維持を模索し、多様な運動を展開してきました。これらの地域でのモンゴル文化の維持の追求は、今も絶えることなく続いています。



ロシア連邦ブリヤート共和国首都ウランウデ

# モンゴル高原の自然と気候

## モンゴル高原の多様なステップ

モンゴル高原は、中央ユーラシア北部のステップ(草原)地帯の東端に位置しています。このため、平坦な草原ばかりが続いて景観に変化のない地域、と思われてしまうかもしれません。しかし、実際には、モンゴル高原の自然は多様であり、日本では決してみられない景観を提供してくれます。



日本に暮らすみなさんが思い浮かべる平坦な**純ステップ**は、左の写真のような光景ではないでしょうか。土地が平坦で、水資源が少ないために大型の樹木が生育しにくい純ステップは、モンゴル高原では東部に多くみられます。地平線がまっすぐに伸びている地域も珍しくありません。遮るものがなく、夏は日光の力が非常に強いです。

モンゴル高原中西部のハンガイ地域などには、比較的水 資源、草資源が多く、樹木も一定程度生育しうる森林ス テップが広がっています。実は、モンゴル遊牧民は、こ のような森林ステップこそ、遊牧にとって適切な最も豊 かな地域だと認識しています。





モンゴル高原南部のゴビは、純ステップよりも水と草がずっと少なく、砂地に展開する<mark>砂漠ステップです。完全な砂</mark>漠ではなく、低灌木や草がまばらに生育しています。ゴビは、これらを食料として生きるラクダに適した地域であり、ラクダ遊牧民が遊牧を行って暮らしています。

# モンゴル高原の森と山河

モンゴル高原の自然は、ステップだけで形成されているわけではありません。森、山、河を含んだ自然豊かな地域です。

モンゴル・ロシア国境近くのタイガ



モンゴル高原の北端、シベリアと隣接する地域には、タイガ(針 葉樹林帯)が広がっています。この地域は、かつては、森の民 と呼ばれる狩猟採集を生業とする人々の住処でした。

オルホン河



遊牧には水源が必須ですが、モンゴル高原には水源を提供する長 大な河や湖があります。

オルホンの赤滝



モンゴル国アルハンガイ県の山中



モンゴル高原の中には、アルタイ山脈、ハンガイ山脈といった山脈 があります。モンゴル人社会では、山は畏敬の念をもって尊崇すべ き存在とされています。

このようなモンゴル高原の豊かな自然と結びつく形で、モンゴル 人は遊牧文化を形成し、自然に寄り添った生活を営んでいるので す。

# モンゴル高原の気候―寒冷、乾燥、高地

モンゴル高原では、夏は40度を超えることがある一方、冬の厳寒期 にはマイナス 40 度を下回ります。6 月くらいまでは雪が降る可能性 があり、短い夏を過ぎると、9月にはまた雪が降り始めます。右の写 真は3月のものです。春とはいっても、気温はマイナス10度くらい にはなり、まだ雪深いです。

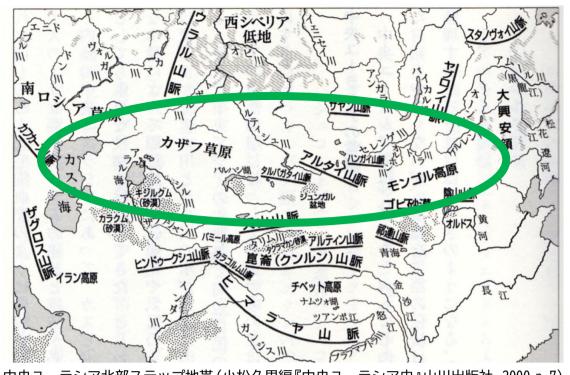
乾燥も、モンゴル高原の気候の大きな特徴です。年平均降雨量は 約 250mm、しかも降雨は夏に集中します。このため、冬は厳寒です が、日本の豪雪地帯のような雪の積もり方はしません。

標高の高さも、モンゴル高原の特徴の1つでしょう。平均高度は 約 1500m、モンゴル国の首都オラーンバートルでも 1300m あります。

モンゴル高原の3月



# モンゴルの遊牧と社会



中央ユーラシア北部ステップ地帯(小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、2000 p.7)

#### モンゴルの遊牧とは?

モンゴル人が長い歴史の中で生業としてき たのが、遊牧です。遊牧は、モンゴル人だけで なく、中央ユーラシア北部のステップ地帯に暮 らしている遊牧民が歴史的に行ってきた生業 です。

乾燥した中央ユーラシア内陸部で一か所に 大量の人間・家畜が集住すると、その一帯の水、 草が尽き、砂漠化に至り、人も動物も暮らせな くなってしまいます。このため、この地域の暮 らす人々は、移動しながら家畜を飼養し、畜産 品を糧として生活する生業一遊牧を行うよう になったのです。概ね紀元前 1000 年頃には、 中央ユーラシアの北部草原地帯に共通した遊 牧文化が現れるようになりました。モンゴルの 遊牧は、馬に騎乗して行うことから「騎馬遊牧」 とも呼ばれます。

# モンゴル遊牧の移動―季節移動

厳しい気候を有するモンゴル高原での遊牧生活は、自然との調和が重視されます。 春夏秋冬、遊牧生活でしなければならない活動は、自然のサイクルに従って決まっています(春には家畜の出産、夏には搾乳、乳製品作り、といったように)。四季の生活に適合した住処を選ばなければ、遊牧民も家畜も生きてはいけません。

このため、モンゴル遊牧では、四季それ ぞれに適した牧地を巡って移動する季節移 動という移動スタイルを取ります。

# 夏から秋への季節移動中のラクダ車

## モンゴル遊牧の家畜―五畜

モンゴルの伝統的遊牧には、飼養すべき五種類の基本的な家畜=<mark>五畜(羊、山羊、馬、牛、ラクダ)</mark>があります。モンゴル高原の厳しい自然に応じた家畜として、この五畜が選択されたのです。現在のモンゴルの遊牧では、住まう地域の自然条件や遊牧民の経験に応じて、五畜の中から 3~4 種類を選択して飼養することが多いです。





ゲル周辺の風景

#### 伝統的な遊牧社会の構造とは?

遊牧社会では、「ある特定の範囲の土地は必ず誰かの所有に帰する」という土地私有概念が、私たちの定住農耕社会よりずっと希薄です。また、遊牧で行われる作業(家畜の放牧、出産、搾乳、フェルト作りなど)は、大規模な家畜群を少数の遊牧民で管理することになります。個人単位ではなく、集団で遊牧作業に当たらなければならないため、家族、複数の家族の集合体、さらにその集合体同士の結びつき、といった集団による協力作業が行われることになります。

このような遊牧生活のあり方から、モンゴルの伝統的遊牧社会では、社会が土地に基づいて形成されるのではなく、遊牧民家庭数戸が集合して小集団に、小集団が集合して中規模集団に、さらには大集団を形成する、という人と家畜の集合体(遊牧集団)の階層的なっながりにより、社会が形成されています。

# モンゴルの仏教

## チベット仏教とモンゴル人

モンゴル人は、チベットからもたらされた仏教を歴史的に信仰してきました。

オラーンバートルのガンダン寺院



インドからチベットに入って独自の発展を遂 げたチベット仏教は、モンゴル帝国の時代にモ ンゴル人社会に入ってきました。フビライ・ハ ーンの時代に、チベット仏教文化が花開いたと 言われています。

帝国が解体した後も、モンゴル人社会では仏教信仰が継続されました。やがてチベット仏教の宗派の1つであるゲルク派がモンゴル人社会に入り、拡大します。

中央ユーラシアのモンゴル人が清朝統治下に組み込まれたことで、チベット仏教を信仰するモンゴル人、満洲人、チベット人が清朝統治下に置かれることになりました。このため、清朝では、仏教振興策が取られ、モンゴル高原に多くの寺院が建立されました。

20 世紀中期以降、各地のモンゴル人社会で仏教は弾 圧を経験することになります。しかし、モンゴル人社会 では、様々な知恵を用いて、仏教信仰を維持しました。

#### ブリヤート共和国のイヴォルガ寺院



ソ連圏社会主義諸国における民主化が発生した 1990 年頃から、仏教は復興し、再び信仰されるようになりました。現在でも、モンゴル人が暮らす各地域に、様々な仏教寺院が残っており、人々の信仰を集めています。



# 近現代の日本とモンゴル

## モンゴルの近現代―モンゴル人の民族運動とロシア、中国

20 世紀、清朝、ロシア帝国の統治下にあった各地のモンゴル人社会で、モンゴル人の統一と自立を目指して多様な活動が展開されました。モンゴルの近現代史の中核に、この民族自決の運動があると言ってよいでしょう。

清朝の統治下にあったモンゴル高原中央部(外モンゴル)のモンゴル人は、内モンゴルなどの他の地域のモンゴル人も関与して、1911 年にモンゴル人の独立国家建設を目指して立ち上がりました。著名な化身僧ジェブツンダムバ・ホトクト 8 世を元首ボグド・ハーンに戴くこのモンゴル人の国(ボグド・ハーン政権)は、他の地域のモンゴル人にも参加を呼びかけながらモンゴル人国家建設を推進します。

1917年のロシア革命後のシベリアの混乱と、1924年のボグド・ハーンの崩御を経て、同年にモンゴル人民共和国が成立します。モンゴル人民共和国はソ連を後ろ盾としながら、モンゴル人独自の国家建設を目指しますが、1930年代後半の大粛清を経て、ソ連の指導の下で社会主義建設を目指す国になりました。



ブリヤートの知識人リンチノ(成 田龍一他著『アジア人物史 10 民 族解放の夢』集英社、2023 p. 488)

ロシアにおいても、モンゴル人は盛んに運動を展開しました。20 世紀、バイカル湖周辺のブリヤートの知識人たちは、ロシアにおける革命的風潮もあり、ロシア帝国の統治下で抵抗運動を展開しました。ロシア革命とその後のロシア内戦期、エルベグドルジ・リンチノのようなブリヤートの青年知識人たちは、反ボリシェヴィキ勢力と、シベリアに進出した



ボグド・ハーン(Чунтын Болдбаатар. *X X* зууны Монголын улстөрийн зүтгэлтнүүд. УБ. 2004. p.15)

日本軍の協力を得て、満洲西部のフルンボイル地域と内モンゴル東部のモンゴル人と共に、「大モンゴル国」建国運動を起こしました。この運動が失敗に終わると、リンチノたちは、ソ連統治下でブリヤート自治のために尽力する一方、外モンゴルのモンゴル人民共和国の国家建設で大いに活躍することになります。

中国領内のモンゴル人も、統一と自立のために様々な活動を展開します。外モンゴルにボグド・ハーン 政権、南に中華民国が成立すると、ボグド・ハーン政権への参加、中華民国の統治下でのモンゴル人の自 立の追求、といった多様な選択肢をそれぞれに取っていきました。1925 年には、中国領内のモンゴル人の 自立を模索する青年知識人たちが内モンゴル人民革命党を結成して運動を展開しましたが、中国情勢の変

化(=国共合作の失敗)を受けて運動は失敗に終わります。その後、満洲〜内モンゴルのモンゴル人が新たな連携先として選択していったのが、大陸進出を本格化させた日本でした。



徳王(森久男『徳王の研究』創土社、 2000)

# 近現代の日本とモンゴル

近現代における日本とモンゴルの出会いは、日本の大陸進出に伴って発生しました。日本人が進出 する先=モンゴル人社会だったのです。

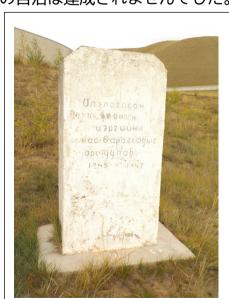
最初の本格的な出会いは、日清・日露戦争期です。朝鮮半島から北上して大陸進出を開始し、ロシア帝国との対決を控えた日本は、内モンゴル東部の有力者に接近します。現地のモンゴル人有力者の中にも、アジアの強国となっていた日本と協力することでモンゴル人社会の自立を達成しようと考え、日本と協力する道を選ぶ者が現れます。例えば、王公グンサンノロブは、日本の近代化の成果を利用して自分の故郷の改革を試みました。

満洲事変期には、満洲〜内モンゴル東部のモンゴル人知識人たちの中に、満洲国で要職を歴任したボヤンマンダフのように、日本と協力することでモンゴル人社会の自治を満洲国内で達成することを目指す者が現れました。しかし、結局、満洲国ではモンゴル人社会の自治は達成されませんでした。

日中戦争期には、内モンゴル中部地域の王公デムチュクドンロブ (徳王)が日本の支援を得てモンゴル人の独立を達成しようとし、 自らの政権(いわゆる蒙疆政権)を建設しました。

しかし、これらの日本との協力によるモンゴル人の活動は、1945 年の日本の敗戦で終わりを迎えることになりました。ソ連の満洲進攻時、モンゴル人民共和国もソ連の同盟国として、「日本支配下のモンゴル人の解放」という目的を掲げて日本に宣戦布告して進攻しました。この時に拘束された日本人のうち、12,000 人以上がモンゴル人民共和国に連行され、1945~1947 年に過酷な強制労働に従事しました。いわゆるモンゴル抑留です。社会主義体制下のモンゴル人民共和国では、モンゴル抑留はなかったことにされていました。民主化後、抑留の実態調査が日本・モンゴル両国で進み、亡くなった方々の慰霊施設が建立されました。

20 世紀後半、モンゴル人民共和国は、国際的に認知され、名実共に独立国家としての地位を確立していきます。その過程で、1972 年、日本とモンゴル人民共和国の間に外交関係が樹立されました。2022 年には両国の外交関係樹立 50 周年を迎えました。これを機に、両国の友好関係のさらなる発展が期待されています。



モンゴル抑留の慰霊施設敷地内にある石碑